

Title	大学における「教育学」成立過程に関する研究： 慶應義塾大学における教育学教育の史的展開を視点として：序
Sub Title	Collaborative studies on the formulating situation of the educational science in Japanese academia: the case of Keio University
Author	山本, 正身(Yamamoto, Masami)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2010
Jtitle	哲學 No.123 (2010. 3) ,p.295- 298
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：教育学の射程 プロジェクト研究論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000123-0295

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

【プロジェクト研究】大学における「教育学」 成立過程に関する研究

——慶應義塾大学における教育学教育の
史的展開を視点として——

序

本特集の掲載論文は、いずれも 2008 年度大学院（社会学研究科）高度化推進研究費に基づいて実施された標記研究の成果報告である。研究は、山梨あや（文学部助教）、篠大輔（大学院社会学研究科博士課程 3 年）、江島顕一（同博士課程 3 年）、柄越祥子（同博士課程 2 年）、渡部恭子（同博士課程 2 年）に、私を加えた 6 名によって進められた（所属は研究開始時）。まずは、『哲学』誌上にこのような研究成果報告の機会を提供して下さった三田哲学会編集幹事をはじめとする同学会編集委員諸氏に、厚く御礼を申し上げる次第である。

大学院高度化推進費による共同研究として、慶應義塾における教育学教育の歴史的展開を辿ろうとしたのは、次のような研究関心に基づくことであつた。

第一に、慶應義塾大学に所属する教育学研究者（教員としてであれ大学院生としてであれ）として、自分たちの研究上のルーツに対するそれなりに明確な認識を得ておきたいという関心が、共同研究者の間で共有されたということである。実際、この研究を開始する以前には、私たちは慶應義塾において教育学教育が始まった時期についても、その経緯や背景についても、明確な知識を持ち合わせていなかった。それゆえ、義塾において教育学教育がどういう展開を辿って今日まで継続されてきたのかを系統立って説明できる人間が周囲に存在しない、という状況にあつた。個々人の研

究にとっても、また今後の義塾における教育学教育のためにも、この際、自分たちの足元を改めて見つめ直しておくべきだということが共同研究者の間で強く意識されたのである。

第二に、慶應義塾における教育学教育の展開を辿ることを通して、そこから、日本の教育学史を再吟味するための興味深い論点を引き出すことが期待されたということである。日本における教育学史の幕開けとなる重要なトピックは、一つには明治8年に文部省が「師範学科取調」のために伊澤修二や高嶺秀夫らをアメリカに派遣したことであり、もう一つには同20年に帝国大学文科大学にドイツ人教師エミール・ハウスクネヒトが招聘されたことである。前者は師範学校での教育学教育を整備し（周知のように、同15年に伊澤が著した『教育学』は、日本で「教育学」と銘打った最初の著書となった）、後者は帝国大学での教育学開講の契機となった（とくに同22年から1年余りの間、文科大学に附設された特約生教育学科は、日本の近代教授理論史上に特筆すべき重要な役割を演じた）。こうして、日本において教育学は、師範学校系列と帝国大学系列のいずれにおいても「教員養成のための学」という役割を与えられてそのスタートを切った。だが、日本の教育学に与えられた「教員養成学」という学的性格は、この学問分野にそれ以外の性格ないし役割をもつ可能性を容認しない、いわば排他的性格として宿命づけられたものであったのか否か。この問題を吟味するための重要な手掛かりが、日本の代表的近代学塾たる慶應義塾の事例に探り得ることが期待されたのである。すなわち、日本における西洋近代学知の研究拠点であった慶應義塾において、教育学の学的役割がどう理解されていたのかを跡づけることは、教育学の学的性格を再吟味するための重要なアプローチたり得ると考えられたのである。

とはいえ、本研究の進捗は遅々たるものであった。その最大の理由は、義塾における教育学教育の歴史の変遷を語ってくれる史資料の蒐集が困難を極めたという点にある。この研究を推し進めるには、少なくとも義塾の

学部・学科における教育学教育の位置づけ、担当教員、講義内容などを明らかにすることが必須の要件と考えられたが、当初の期待通りの関連資料を入手することはそれほど簡単なことではなかった。結果として、研究上の最重要資料は、『慶應義塾百年史』（上巻 1958 年、中巻〔前〕1960 年、中巻〔後〕1964 年、下巻 1968 年、別巻 1962 年、付録 1969 年）とならざるを得なかった。

さらに当初は、①慶應義塾創立～大学部発足時（1890 年）、②大学部発足時～専門学校令制定時（1903 年）、③専門学校令制定時～大学令制定時（1918 年）、④大学令制定時～新制大学発足時（1947 年）、⑤新制大学発足時～現在、という五つの時期区分に基づいて各時期における教育学教育の諸動向を跡づける計画であったが、今回の成果報告では新制大学発足時以後にまで研究を進めることができなかつた（しかもこの時期の諸動向を追うことには、それ以前の時期に対するそれをはるかに上回る膨大な分析作業が待ち受けているはずである）。これ以外の各時期の分析についても必ずしも詳細を尽くしたものは認めがたく、その意味で本研究が、方法においても、実績としても、教育学史研究としては依然として不十分な段階にある、ということは否めない。

とはいえ、不十分なながらも、慶應義塾の創立時から新制大学発足時に至るまでのほぼ百年にわたる期間の諸動向を、教育学教育の展開という関心から系統づける試みが一定の成果となって現れたことには、それ相応の学問的意義が認められてよいと思われる。私たちは、所載の四論文を通して、少なくとも戦前における慶應義塾の教育学教育史に対する概略的理解を獲得することが可能となった。そして、何よりも、義塾における教育学教育が必ずしも「教員養成学」としてのみ展開されていたわけではないこと、従って教育学の学的役割が「教員養成」（その限りでの「近代国家体制への奉仕」）とは異なる文脈の中に探られ得る可能性を、慶應義塾の事例の中に発見することができた。その研究上の意義については、各論文で

序

の考察の跡をご参照いただきたい。

もとより、私たちの共同研究は本特集での論文掲載をもって完結するものではない。今後新制大学発足以後の諸動向の追跡を含め、慶應義塾教育学教育史のより詳細で精緻な把握に継続的に取り組んでいく所存であることはいままでもない。最後に、史資料の調査にご協力いただいた塾監局、福澤研究センター、学生部学事担当に深甚なる感謝の意を表し、標記特集の序文とさせていただく次第である。

2009年10月30日研究代表者 山本正身（文学部教授）